

スポーツにおける若者(女子)の ライフスタイル

梅津 迪子 (女子聖学院短期大学)

スポーツ 若者 ライフスタイル

1. 研究目的

現代青年の特徴として、対人関係の未熟さ、稀薄さが指摘されている。エリクソンは、成人初期の発達課題の一つに「親密性」(intimacy)をあげている。この「親密性」は「他者」と「自己」に二分されるが、現在の若者は「自己」への個人的ナルシズムへ傾き、「他者」とのバランスに欠けている。このことは、自己のアイデンティティの確立と関連するが、概して、この確信が持てない青年は人間関係の「親密」な関わりを回避しがちであるといわれている。対人関係が土台のクラブ活動においても、所属率が減少の傾向にあり、その存在理由やあり方に変化がみられる。クラブ活動は、参加したい者が自由に、自覚した要求にもとづく有志の集団活動であるが、現在はクラブ活動への所属もファッション化、「群れ」志向になっている。(そこに行くだけで満足感を得る) スポーツ種目も、チームスポーツより個人種目が多く、四季に応じたオールラウンドの同好会型で学外交流が盛んである。活動への参加は、スポーツ・体育の好嫌度に関連しており、その好き嫌いは、両親のスポーツ活動への興味や理解の有無、幼小期における自然空間での遊びの量、従来の体育授業内におけるマイナス体験等が複合し影響していると思われる。

そこで、過去のクラブ活動所属者を中心に、スポーツにおける女子のライフスタイルの実態を把握し、問題点を整理するとともに今後のレジャー・レクリエーションにおけるスポーツのあり方を検討するための資料としたい。

2. 研究方法

関東・東北地方の短大・大学の各2年生女子1544名を対象にアンケート調査を実施。調査時期は1990年4月～5月。統計処理は福島大学行政社会学部統計処理センター。

3. 結果と考察

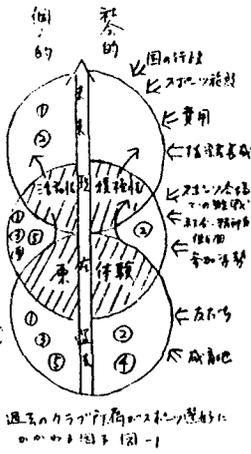
(1) クラブ活動の現状

ここでは、中学・高校時代の6年間クラブ活動所属者(中イ～高イ)を所属型、対して無所属(中ハ～高ハ)を未所属型とし、二つの型を軸に有意差がみられた項目について述べる。

過去のクラブ活動所属 表-1

所属のタイプ	%
中イ - 高イ	30.0
中中イ - 高中イ	11.0
中中中イ - 高中中イ	19.9
中中中ロ - 高中中ロ	2.4
中中中ハ - 高中中ハ	2.9
中中ハ - 高中ハ	8.3
中ハ - 高ハ	3.1
中ハ - 高ハ	2.6
中ハ - 高ハ	17.5
不明	2.3

中イ…中学時代3年間所属
中中イ…一時期所属しなかった
中中中イ…全高時代3年間所属
中中中ロ…一時期所属しなかった
中中中ハ…全高時代3年間所属
中中ハ…一時期所属しなかった
中ハ…全高時代3年間所属
中ハ…一時期所属しなかった



有意差のみられた因子 表-2

	項目	有意水準
未来	①結婚後のスポーツへの積極的にかかわり	※※※※
	②子供のスポーツ活動奨励	※※※※
現在	①現クラブの所属の有無	※※※※※
	②スポーツ仲間の有無	※※※※※
	③運動不足、体力の自信の有無	※※※※※
	④⑤運動快不快	※※※※※
	⑤スポーツ観への関心の有無	※※※※※
過去	①両親の市街でのスポーツ活動への理解	※※※※※
	②自然小・中・高のクラブ活動への参加	※※※※※
	③小さい中・高のクラブ活動への参加	※※※※※
	④⑤授業に携わること	※※※※※
	⑤授業に携わること	※※※※※

※※※ 0.001 > ※※ 0.01 >

表1に示す通り、所属型は30%、未所属型は17.5%であった。現在のクラブ活動への所属率は所属型が69.4%であり、タイプ別では運動部34.1%、同好会31%、不明30%と三分されるが、活動への参加姿勢は56.4%が積極的である。未所属型は、所属型の半分以下(30.6%)で運動部4.4%、同好会22.8%、69.4%は不明である。参加姿勢は「非常に積極的」が4.4%である。ここでも69.4%が不明であるのは、名目的所属によるのか、好きな時だけ参加するため、タイプ別や参加姿勢の判断に苦慮している姿が伺える。所属型においても、同好会や不明者を合わせると60%以上になり、現在のクラブ活動が名目的であったり、組織に束縛されない自由性を持ち、活動の目的、存在のあり型が変容してきている。

(2)過去のクラブ活動所属の有無にかかわる要因

所属型と未所属型を軸として有意差がみられた項目を過去・現在・未来の角度から、個人的要因、社会的要因に分類し、構造化したのが図1、表2である。

過去における要因は所属型の幼小期における遊びが「自然」23%、「市街地」72%に比べ、未所属型は5~7ポイント低く、逆に「家の中」での遊びが11.3ポイント高い。両親のスポーツ活動に対する興味や理解の程度は所属型が未所属型に比べ6~8ポイント高く、父より母に多くみられる。そして過去の体育授業内での嫌な体験は所属型でも半分以上あり、未所属型は79.3%もある。内訳はいずれの型も「うまくなれない」「おもしろくない」といった自己の技能に関するものが多い。スポーツの好き嫌いとは上記の要因を背景に「できる、できない」が他人にも分かることや、「うまくできない」ことが好き嫌いとなり、「無理矢理やらされた」と感じるのであろう。できるようになった時のたのしさを体感することや、幼小期における色々な原体験の量がクラブ活動所属に影響し、現在の活動への積極性や行動力に移行していくことになるであろう。

(3)スポーツにおけるライフスタイル

スポーツの「好き嫌い」は所属型と未所属型で29ポイントの差があり、「非常に好き」な者との差は30.5ポイント所属型が高い。「スポーツ仲間」は、所属型の65.7%が「多い」のに比べ、未所属型は「ない」者が50.9%である。「スポーツ欄」への興味は所属型の69.4%が「ある」のに対し、未所属は50.9%が「ない」と答えている。「スポーツをして汗をかくこと」については所属型の95.4%が「好き」であり、未所属型は13.1ポイント低い。

「運動不足」については未所属型が92.2%、所属型が66.6%「感じている」としており所属型のクラブ活動量が充分でないことが伺える。

「自分の体力への自信」は所属型52.2%が「ある」とし、未所属型はその半分である。

「スポーツ観戦」の種目や、「将来やってみたいスポーツの種目」については、所属の型に関連なく「テニス、スキー、水泳、ゴルフ、乗馬、エアロビクス」等の野外での個人種目が多く、社会のニーズや情報によって選択肢が変化していると思われる。

4. まとめ

所属型に幼小期における戸外での遊びが多くみられ、親のスポーツへの関心も高い。スポーツの好きな者が多く、現在のクラブ活動所属率は約70%である。参加姿勢も積極的であり、スポーツ欄への興味もあるが、自己の運動不足や体力への自信は50~66%である。

未所属型は過去の体育授業でのマイナス体験や、スポーツの好嫌度が影響し、現在のクラブ所属は所属型の1/2である。活動も名目的で、自己の運動不足や体力への自信もないが、将来やりたいスポーツは所属型と同じである。